第廿八號
一冊一
堅々山氏藏

第世八號
一冊一
堅々山氏藏

早稲田大学図書館

合考人藏

曙文庫
浮世文庫

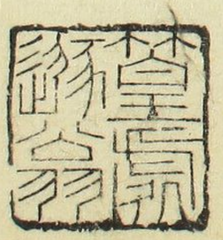
世間やうやうとかるる事和りとなる
なるべしまりは世をえまたしく
よ中下の人まるるにうるるとのと
へこのしぬるなりたいきとしい
事ものまきこうをやまきこと
ばふよをあるかなりゆていき四

時時参りに行きて世話しける
つるのりさうれの中より月と花とを
詠して七十一歳より方々あて職人
六合と以名書けるいひしれぬものの
比丘尼なるのこれ行方知れぬ名ばかり
ふの孫と木のれれまことらすす家

[illegible]
なるも後にはいとかしこあうふ源
家の武蔵こく大井河れおのこと侍る
まくひすてあまりわく心中に秋と
ゆうにはるつ判の風しまるやう
れりしのこれこの出ることを

つまのをとこ古代のつう
しれる今をこうとをきうすがりぬ
をてゆくく人をとひとをまま
とをあるをいつてこそれおこう
あをひあふふれうれてえう
ぬをのふまをいやをなをいを

ふうをあををにあをれ
をんう延享ものを文日時来の
菅原孝標



天地ひらけし時さのかこと人ならぬ物
けうしの道をもおしはかりてもはかり
なきことにこそやまとくにの人も
て唐邦のこゝろさなりけるいにしへの道に
も通ひ人ものことを和らげて食乃道こ
そ外国の人まねびしるものもあらん
とのあるべきものなりとかくてい
とうく尤なりと申しかくてい
ハ月と嘉を出して京洛あつまり判ものし
ける事やう

七十一番歌合

題

月

恋

左　一番

をしかのまたなくこゑもいとやをそ野はさかりすぎにけるかな

右

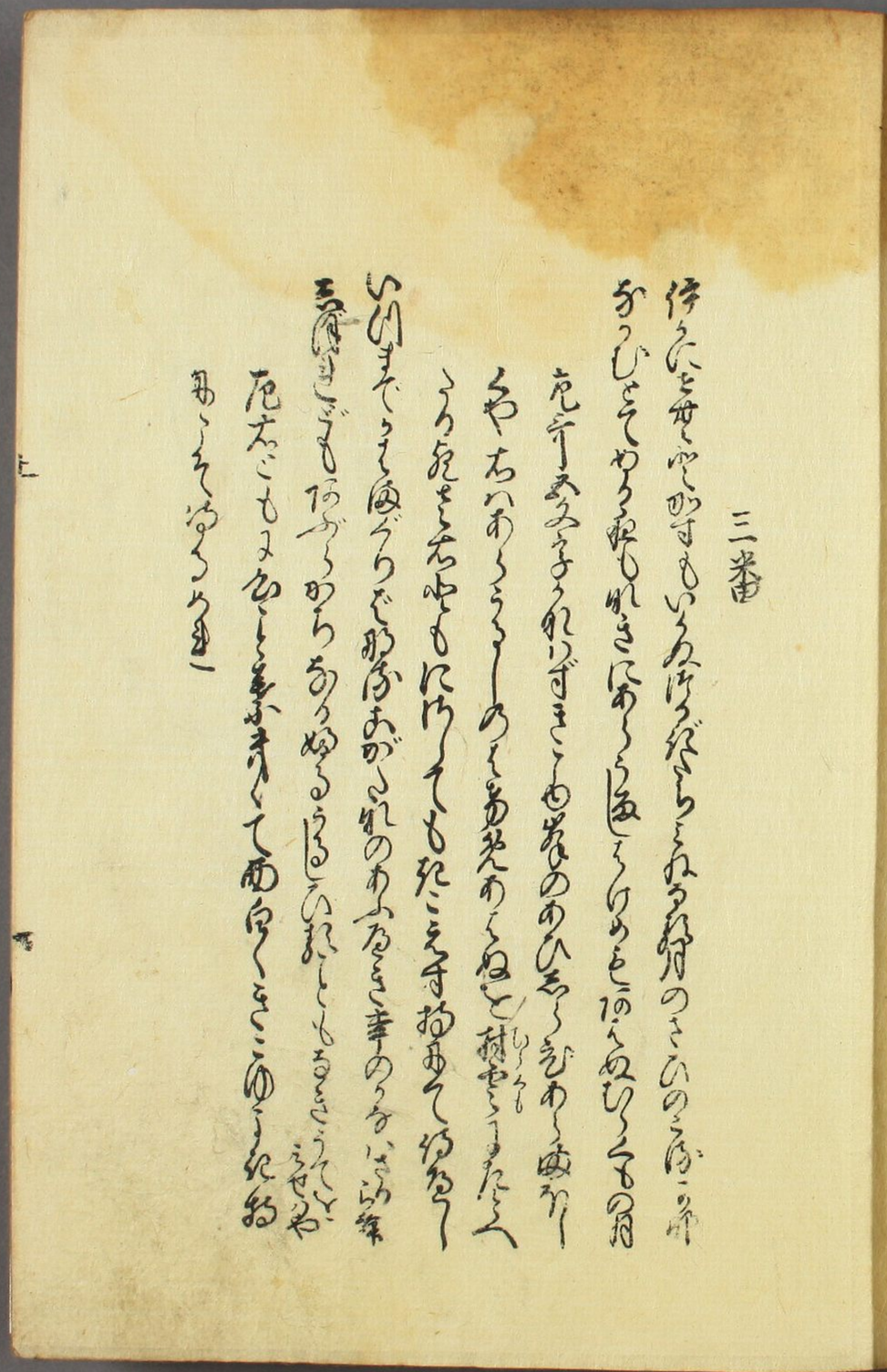
のきばあれてあるさかちやはなをうつしけるもとの人のこゝろさ
たのうたさあるとも月ごとにくつけられもせず合すなる
ゆく月のやれくるこゝろはたれかはしらんとはいはれもせ
れいといるろも月をかなしくらはるとも車へ入れと
を一まの右ちまはたなすくへて拾遺に車屋一
人なりとみひとつ月一本はかりあるらの月てたの月はかりなる
うたのやうにあるはかりなるとこゝろをのそかれぬ
たちくるにてなけのひかりはかりなるこゝろのそかれぬ
どの方さはるうへ拾遺

左

二番

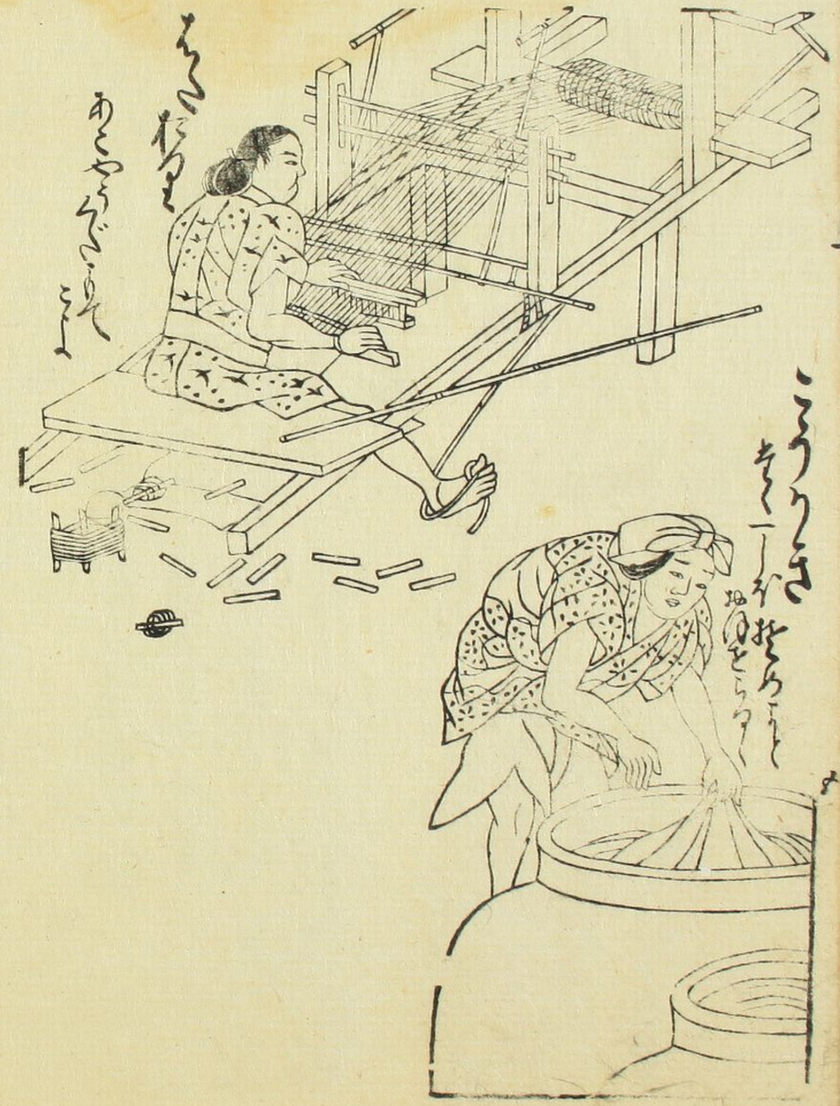
かゞ屋めうし
やまくうらう
いへあてこと
ばとりてこ
かゞ屋のたく
まいさく作
そゞ流らく
して
いつや
ひとゞぬきさ
けもの
かゝるゞ
とゝさ

三番



四番

はだかの身をひとしれぬ身を我ひらうる雑わきの夜時雨
よるはいやおもひ紙を歯しらぬ歌の身まてぬぎさうしてたる月
左ハ秋道のさいう歯ともさえさり右ハ弁らまうる
ひしくてさうも月のしなることかめぐりもく絵ハ也
ひかりも紙也勝へくや
さる歯川おもしろもいなやちさ雑ぬよあれがら谷の出前るか
おりもの身もなどにまんハ公いそて的に向てある身に
左方とさよ歌さ歯よろし左有く勝負ある(さゞるへ
右れ方の文字よろりまつの自まくしまくいひかぬなりす
あしハ歯さるるとや申へらむ



立春

くまもなくゆり新年に月をかぎりとしてまげられて
あり洛中にて西門をくまの月をとりくらべてハ
九月月をまづのいとく年入月を祝ぎ毎日ひとり酒
しかるさにて右月ばかりそくばくのきもしいかも
くまよりくに西右勝ぬしそ
あ事ハうまごとばめれけくらのばばのこしてなくこと
もぐきしくさひもさくのなどぶきのめぐりのつぎさあるぶ
ちさこばめの稼かぎばうとつくるけまあるく
さこの右九ハさりやさまゆるとり月北のこと立春
ばもめぐ所さよめり梅をしつせぐさにくそうり見
八九勝ばうく

上

名月一枝を紙のこゝろ
もらさけの手みーうこ
九月八日九月八日八九月
さこつけて志ゝも月を
よむひくまを紙なりひいつるけ
孫とるる風流とうまりすたる
ら紙やひとうるる人
紙意ハ志のふやす紙ごさ
九月行四しまを
やはり九月ハいけ

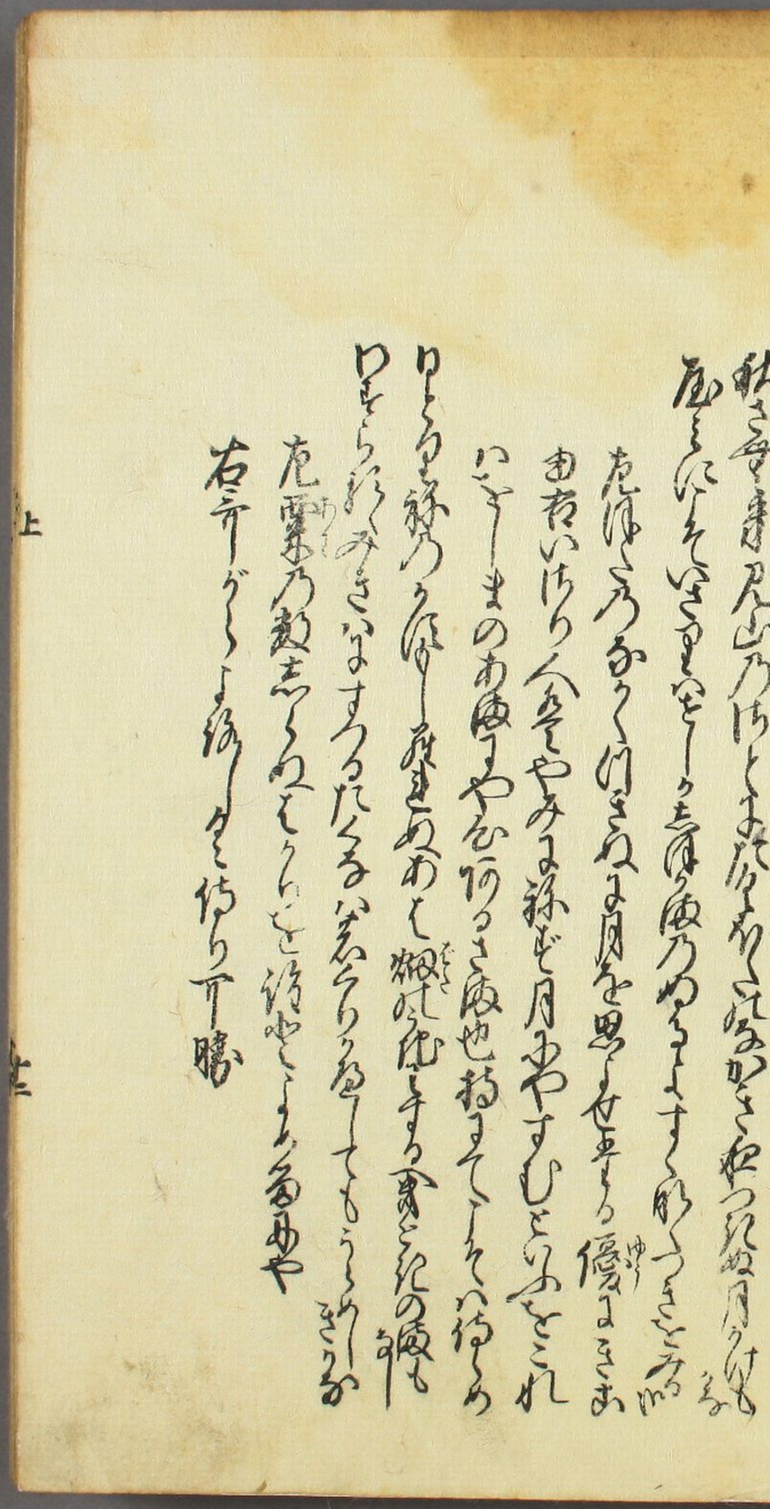
八番

九番

十番

秋の夜もかさりあるとけ年寄ハ
いまさら月ハ見たくもなしとあっぱくさるけるとすれば
月ハ
花ばかりもよとのまう附乃月とかくこそ見度月のなん
あるへくハ花ハ遊興のかぎりくるわ物の物
ひまのあばく花うとの中花者のようひわ月さまかくれ
あさかるる乃ゆきあり乃くしかうに秋わひつるかや今ようる
花ハ月ハ秋ハ悪しおがるまくさ花ハ月ハ
月ハあるるよりくらうどくらう附人ハ秋わくるうやた
もれちれ消ハ月わりあるへき事一服のあせ乃河ハか
一ちなるへ一ある物

十一書



十二番

かるうさの乃ぞくてるまてしあ生そのとゆくつ川ゆ中の湯番
名ゆみをもとつ花ぜ〜ろうこ先伯内ケをちをつ孫作ろ〜あ
たたもよ打ろくゆ作り干の和
やとゆてゆて場す彩ろうまあうろうこ白の
あこゆよ高ぞくろ尺角くさ赤赤和かり松ゆ赤ことが
こ八逆巡あり赤八久器の寺ゆとくこ白明こと
もろあくや

# 木こり

## 十三番

樵(あき)のあり所のひろきとはいへども
秋さむき鶴(たづ)のあつさ
花千代の侍(さぶらひ)千の月をとゝめる名ハ
しくさこも紙ものこ今すこし四さるはた
伊勢の国の産もあ鳥(とり)のやせなすひむくのこゝろ
刀絲こうきあつきの紙ぬぐひ
方鶴(ひ)よ風をとゝむしこ
むくはこゝろ
おい道ハたゝこゝ
おつく作りこ腰くゝや

十四番

十五番

いとうり

十六番

十七番

二

十八番

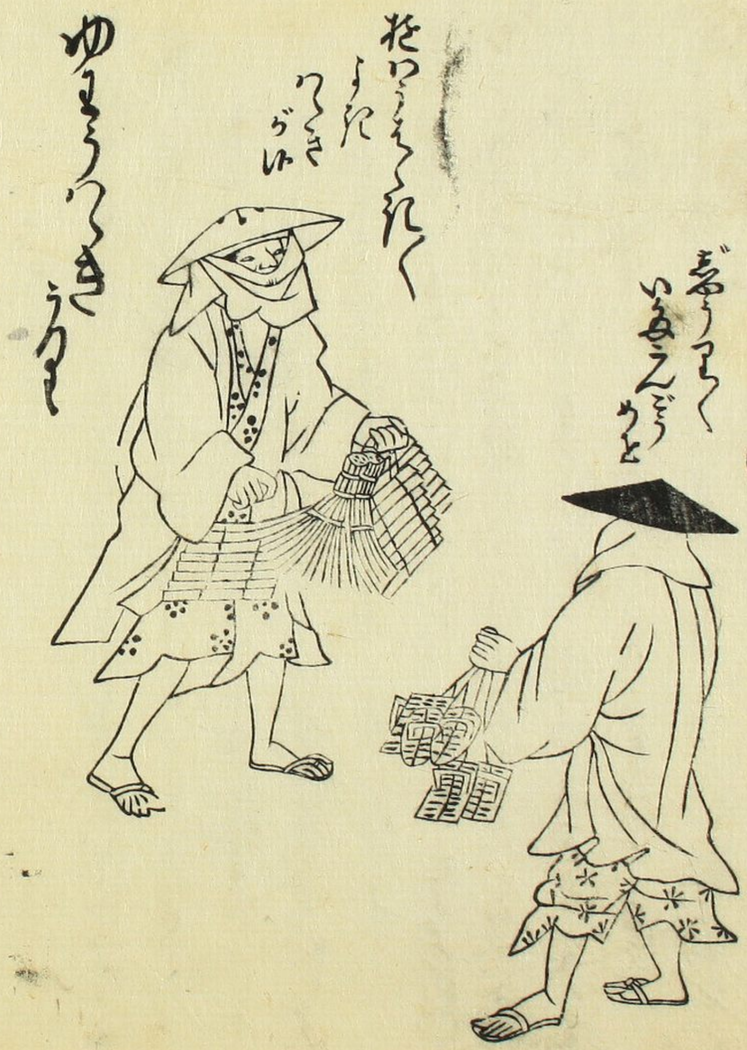
上

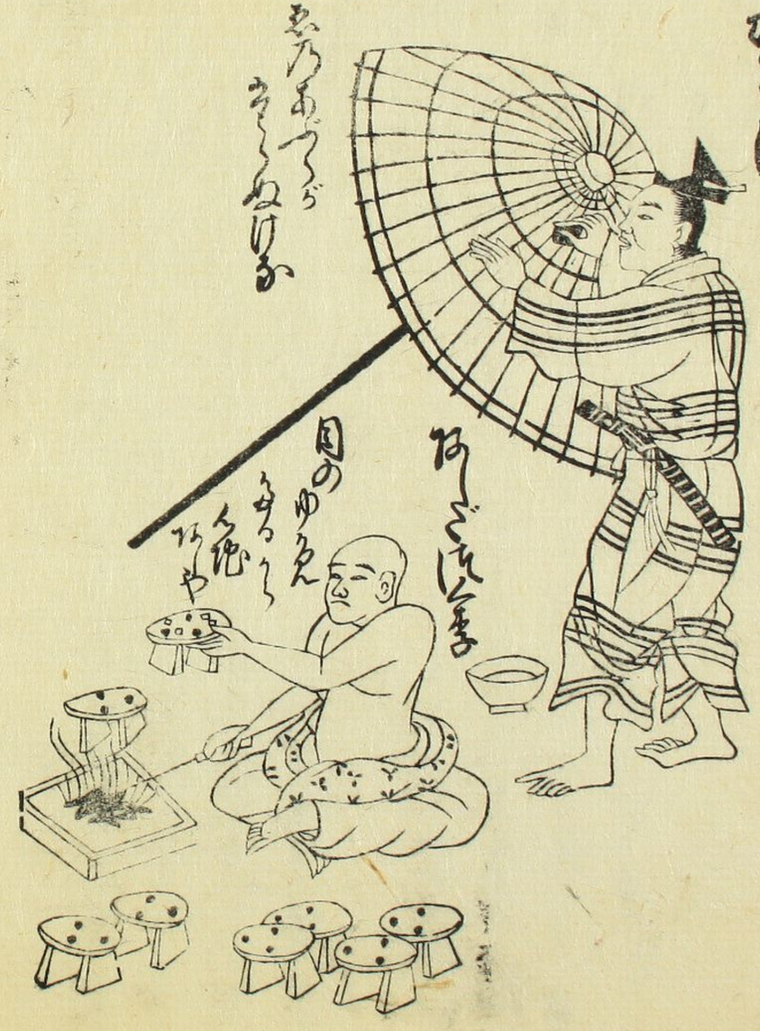
十九書

二十義

ぶんしやうの
をうくなる
いとまを

ようひざのあま
ごらうさうそで




ひさけ
あつらへ
目のゆゑ
あつらへ

虎　二十四番

右

虎

虎ものる業の所のまさつけて一機とひとせにゆこうすし
こういやはしく行ものはいくいせんしわ歩の歩の業
よるもあやを思ひひたるもの行れてきあ行物を後へ

廿五番

緑とめしてあれやりけるといふ露の月さゆる夜とも今朝ハ
つきうけの浮ゆるを　あらためて池ハ枯葉もの々露のみさびしからん
左ハ月のみくれ車とをもへ出てしあらん右ハめぐり
きかよせくる色も清らしくゆう道のこゝさ女庭すゆる
晩の露乃あはれなる人まで秋寒とのきこえ不たちのまぼとこゝそ
ゆくゆく露さのこの月のちをしあつくしかゝはれず　て露しろくせ
左ハ古歌のしらしあはれふかゞく秋の露のかげくら
たがらなりくるめがや右ハ哀れつゞかんりがらくれ
とらま車侍るやされどいゝ悲しくやゆ道ハまけなる
歟し

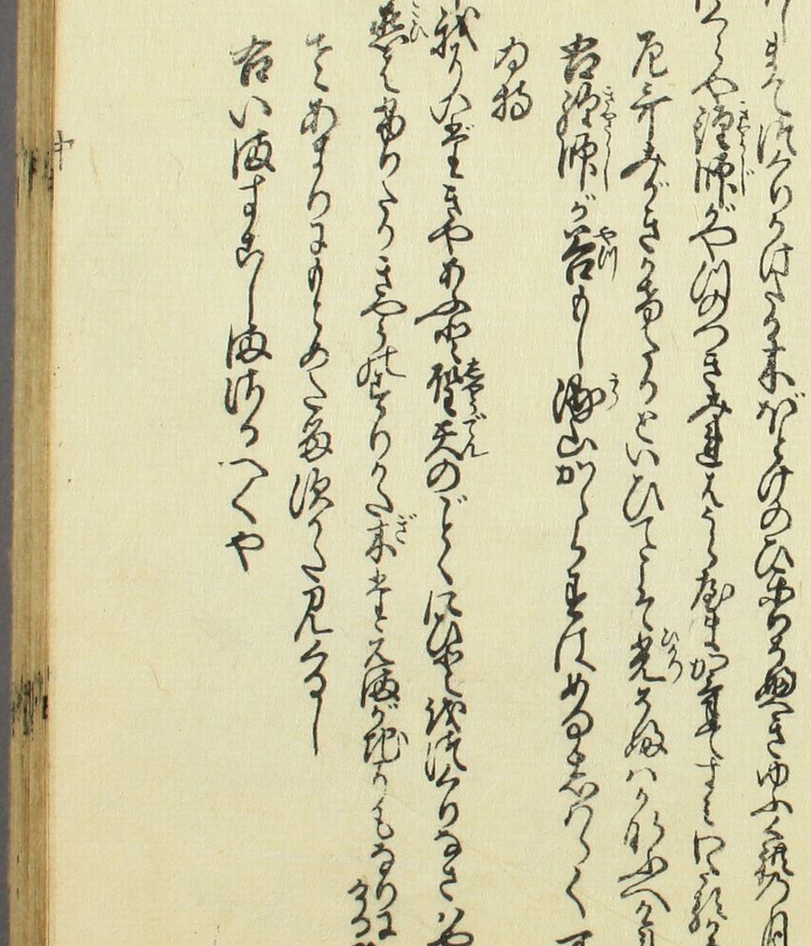
## 琵琶法師

あまくものゆりの尾上にたつ
夕くれの月
ちぬの浦の
ふ情

## 雅楽



## 乃六番



佛師

阿弥陀のばう先
きんげざを
拵つて法師が
身がひてくれ給

経師

山寒をまぎらいかに
きくらまり
きたまの
うれしぬよ

九七番

いかにも他の心もちくはさりぬのひ筆まてとかつわきの良月
枕ハ苦きりさ海ちならちかうの外も霧深やうに月のひかりさし添
左右ともに月の光さよあり程ありるとも一首れ
ひのひかろうして得まがすてめさし為勝
右さ是とも又枕を使人の目めきてく やくすちの由ちまで花
其うゐてるさふゐ孫ときひわいのかそへつ家無もすうる
左ハてとあれくる孫し古ハ海とは是もろへ此歌
うくひ余り程勝へくや

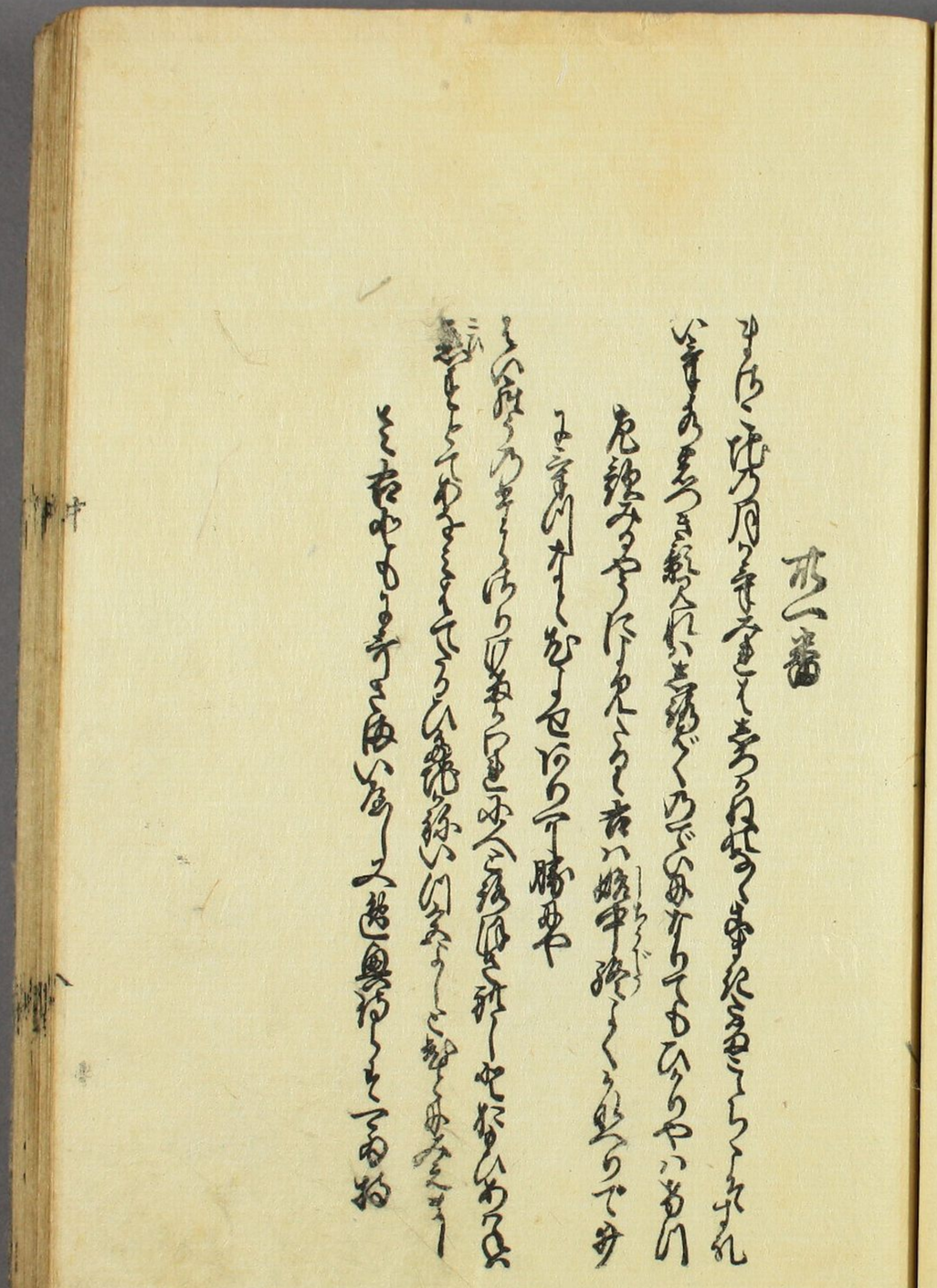
## 八番

## 絵師

## 廿九番

左の哥こそ見えくずむ春の月影りハいかゞあらんと思ふあまも
あやしげなれバ右ハ花の都のまなびにまさりて猶ことわりをしる
それハむかしのやまとゑハ筆の事なりや清原の元輔
か海月とか言ひしも絵にうつしはらはぬにや
ぬくゝ蛍の火の面白さをいふも業平がよみし夜半の螢ハ
ものかはりと見ゆるものと歌合のそれを詠む人ハ思ひしに
左ハぬく当座のおもはくハいつまでの打ちかはらぬ面影をしるしと
いふ哥の事と思ひてよめる也
右ハ当道の事にもあらずとも何にかはせん
勝ちにや

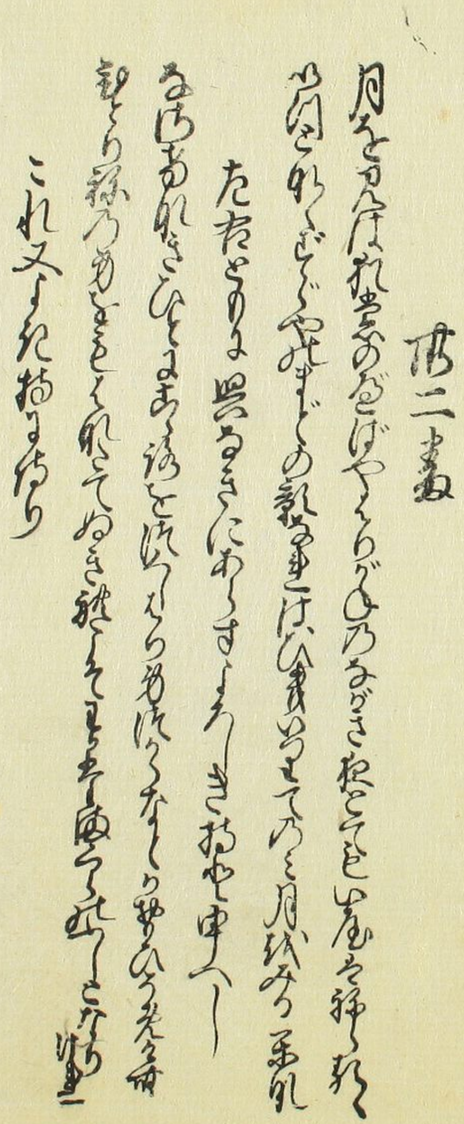
三十番



ぼくうら







色にいでし

まくら見せぎ

花巴集

このあいだ洗ひ出してやうやく〱やまず宇多の月をばまたよなは
見ぬうらみこよひの月をそれぬ雲ふゆ霜乾風をさ飛ぶさゆして
花は茶のやまひを切る雨あし北嶺なり
古へ月にむかひひろびすくなりて内招花
あき秋のこひ惑の尾は秋さ宇の野きさらぬ影をさらせ出花の雨
おもひめでて仏のや雨や出て我が持ちてはりふ平さのあかいわをて分邪
花乗るゆ花ハ香ら袖につく枕ひらきをめた
古いろの歳まうて竹かの原し 勝

## 北九書

ひかりやあらたまるとしたちかへるあさ月いてそしらぬ花のそらかな

ゆめうつくしきさくらもいとまちかふれしとのうまれ茶ふくまつの月

花ちりやとしかへるさ海もゆるのまつのみ山ぶきうつくしあれ

ゆめもとゝ水の月すまをよめぬの月清けんくまあめぬちそうぬ

こひすてふこゝろをしらの風ふれ世かみるの川まうれるまけ夏

さみくれこゝろのぬゝぶ清あらをまゝみどりをつゝ西

まうるふつゝさすゝ水ゝそ花ゝ

まゐらり

ごうぬう事

ちゃうんう事

これハ事さうしあること



## 廿八番

あさかの山ハ[illegible]

ありの実やかうぢのむらやまぶき[illegible]

[illegible]

[illegible]

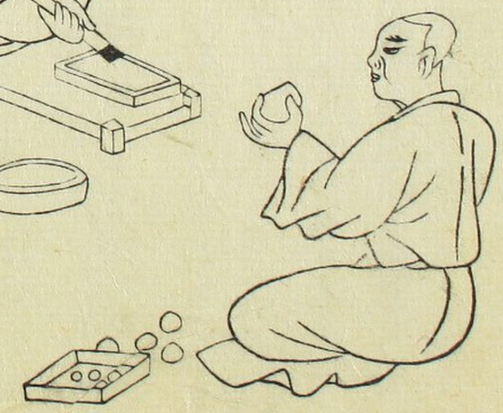
[illegible]

右依有異[illegible]勝

## 九月

のさかつきはもとより月見ばかりにあらず
あるべきものなれども月見にことよせて
月の雲もなきいひさかりの月新酒といひてもふ合むを
をみうしなひてうしなひ拍なりゝ
ゝるもかへしてゝるものとうなひ物の半月のごとくなり時、
何事をなすにもまづ月見をもてはやしてこんがうまつりをるとかの
花は簡尾やけいくまあるとまたうさけはいはんかの事
もかれいはるゝ世ことにうきさうくさこえ半れとを
世四九月あるまりよこ分こ見ものゆと勝へくや

## 玉ちり



## 煙草

一のぢうと

とうしんう手

四十一番

月乃ゆかりのしるをとうよりあやかり申さいまかけめや
ふるさとのあるくいなかのあけぬるを月とみるかな
先者ゆるさせ給ひ
ハやすまてうつ夢の紙ぶくわつやいと
ちひむうそとうるをやつ風まをこたるみくろ
花ハ〳〵そ乃〳〵の御方なりハ先さまと
ゆ方ふて方ぬ
わりもやきこゆ
いふいく紙とくるとく御くきまやらの合て力結

第二番

大井川の舟わたしのつめたくいはずしれぬるまでしらみる月のかげやどる
ゆく水にてはなくあはれをしらぬ揚てまかり月にや夜のさむさ来
旅のけして罪のかけまでも業の行月に山風を詠ふ
ひおりて以右為勝

やま田屋のまへを来のくま戸さしたる雑も来ぬなかのいはゆるかたち
いふにも毎とあふ年かくれゆすみ来ぬなれはなれぬ人の心と
たださともよいはされねく意乃なかなかならし
御判

第三番

[illegible]

第六番

浅乃月はゝてを海てむさし野に於て井家の草露の宿は秦乃礼
すかんとは、此うち浅乃月や当風さこれ始模擬外者何きの行者紀
草露乃名月は、けりれ浅の光をとゝめたふる給へき信仰も
明らけ也右は猶のの月に對して名たゝる楓樹はまつるところとも
見る歌の由もいひ出すの本絶心ある者を、以けう風雅かの俳諧の
三秋花の月毎も是と海へると取てこそ侍らめ
左歌は、此けふあつきる乃むしを、如何にも人のきこえさきゝ見れはと道
あるやさしき人すゝめの名風情行のゆふはてしかなて
右八雲まて此の孫のとしの絵かたる毎のとゝせたる乃馬ひ
しうと、いおのとゝかすゆ毎の弱ものとい、かの万葉
丸古風をしも楽さもありて非ものに侍りたてる勝

月ごとにくらべ見る境乃もんぜ年毎の年代の経道のひとそ堂なる

右

たとえ一度にあて毎日の所沢目のいるとうとう毎月乃ひとつとい
花田とうに文者九郎兵衛が沢ひとつるるとと申めるし文選と門弟にて家の手屋もたいくるよ雑言乃ひと
竿鉄なる虫懐九郎兵衛と面白くさに狂者も河おいて
げ毎もたくさんとうどうりけるさなりけるまぬを月乃年まい
る方いに公れをふれるふるとい花乃藤
やくよ浦とけいいいるまなどんし毎とうすきとろの八金をかき藤
乗り酒とろの二道とろ彩もの孫毎と夫けきいもひとごとを寺乃藤
花田乃者も河やけとうぐるとろ花毎よろ乳毎り年乃ち藤八
やもよ兵の虫懐也とろ乳持なるへ

文者

六藝乃其一ハむかし武道もてはれ樂之事

遠ハ天をはり命ハ義によりてかろし

らぬのま

第八番

法じ見ゐ絶えて在けるもいとし月ぞ秋こそびめそしらる

くも流ひの尽せはつきさそくを流る君がくまぬ秋のもも中を

右こ分義のし紀さこるなるくそや古今當世にも新しき月に

法ら紀小登山その名ハかく称さるもしらさい藝善髭を

やよそてるるや道によりてかしくあまきハ右勝

日本の親ゆるとへてもむかしの秋とと舞ふ歌うりけるが無き女めの

輪にくるて能も楽しぬひ女がくはまひあやせて八志ら者や

右昔乃男舞ゆゑ元れとめなし気め紀くる右勝れ白

法く手の母君ハ袖うら婉らしやいひそ志りさや

どいおとらぬくろハ快光源氏乃弄と思ひつる紀つは

しく侍ときのうるをあらけてうれさいなるやあま

てあらむ次ましく左下勝や

第九話

月見つくりの事

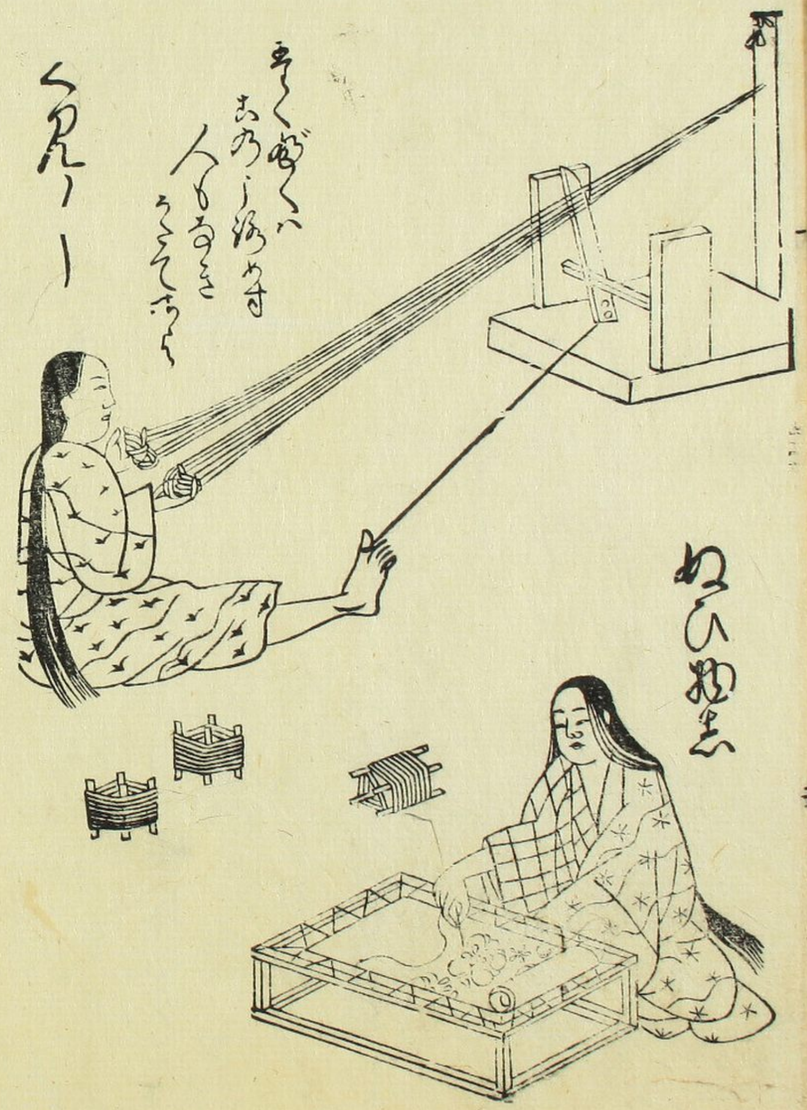
月見つくりの事

月見つくりの事

## 五十番

でんがくのちるをむしろにならべんとの秋くて月かげほそくみえけり 右
秋の霧たちかくれゆきてのちこそ金のなる木の夜かすみ月をみるこの枝
左ハ首尾いひかれ也 右ハ上句事かはりたれども 長
秋月見る所こぞうらやましとはあまりくどくきこえて 勝
よるなれどもけふもきえてしまふ事かなのひとへにかつくす左ハ
あるゆきてもくひやよそ人のまぎれゆくすべなる人をみる
左右ともによき道のすくさをとりて為ありけれ
げにやはりしめの持

五十一番



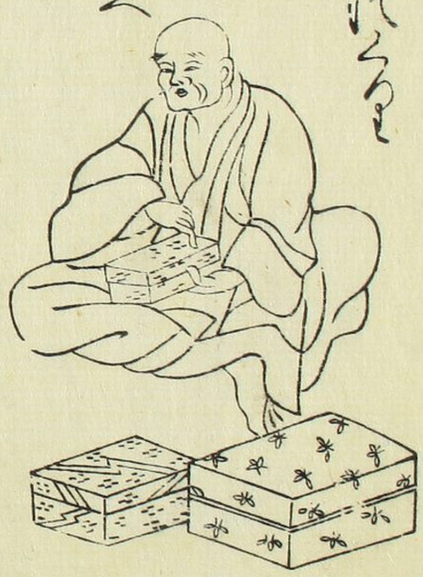
## 五十二番

未だ年さ月とは名ばかりの花ばかり光八の松とうたはれ
ぬ年くうの月ん名ばかりうちうちの月ばかりの月
ものはさ花ばかりと明けの月
清ひすの月名ばかりの月ん名ばかりの月
ます　ばやさ月ばかりの月ん名ばかりの月
花ばかりの歌仙の月
この句は

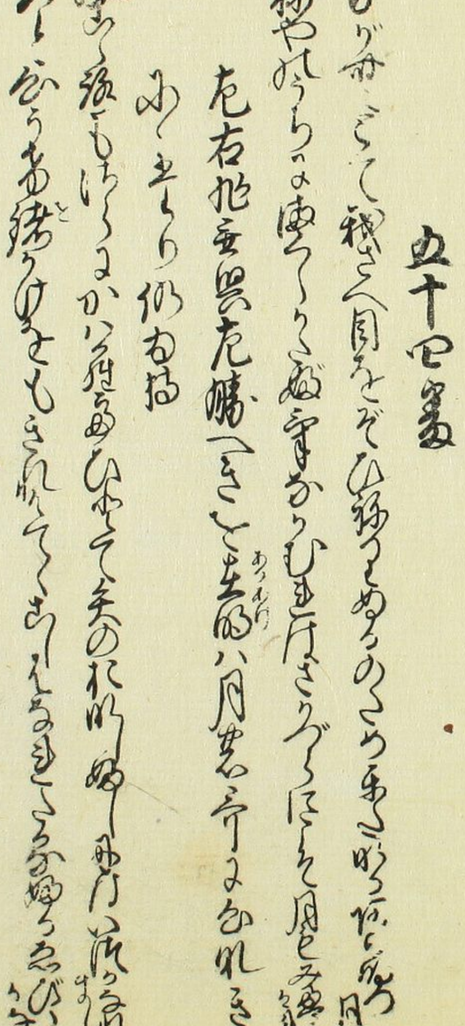
五十三番

罕九ツく凡金よ凡ゆるうり上げ飛ばしつてえかれのさ乃尺紙
月とくろく喰つく傳よの方筆と衣裳乃かや流る家行かそくこれ
左問儀畫てき正見ゆるし古嫁しかまし給ふた
おもよせかりすうし波けり屋くや
枕返八ゆきけろき銭わわ衣つくらく廣とは生れ那さ路しまぞ花さ
何筆乃ぶ寄くまなうえの法ひかとゞ上蔵くほるよ人げさ寄り都
花弁つく花はけれとら無地得りやら余といまるこ分明
あら家右ぶゆくといふてとどこいかれやかかされさ
つくご志ゆくしなし縁乃こと紊りやけ花乃筆ちう
けるかんかしまゞわ古勝

つゞ屋作ゝる



五十四番



五十又書

くるとがんれくらいりちさ安風ふまめたうの屋てまもむ河内やたり
ぬちくさ竹くりぬ竹やむちぐ尺の白もまるぬ貴たちやうなりるる
尼ゐもゐまくくくまくりの絵
ちがぬ竹くさぐ竹ひさあゆくさ絵いやめと尺之尺ゆくるさ
絵てもあゆまるられて所人のむ尺さるのあでまをれ
ちゐ花安風清四絵

ひさめ
一ぞくのまつ山ひさめハ
にくそてゆあ
むいだこさ
ゆあ
あつ出れ
むかはきや
ぎまろし
ち



五十六番

さるもしきてこうねもはるあけんさひのちぐそで　ゆう秋の秋月
月ぶ　ゆうろまゆをくうとみゆるつねりやこれ夏月ぶりと
　　左六月みるとて　合やうねぐ　けんさひのさひろうん
　　ちろうけて　ゆ　ちろうんさひと　合　ゆう　月　見　ゆ　ゆ
　　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
一ぞくはゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
　　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
　　左　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
　　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

金毘羅

水ゝ

九十七番

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五十八番

白めんよう

いろめの
めをれう
そばうも
しやくと
くいい

ひろう紙

五十九番

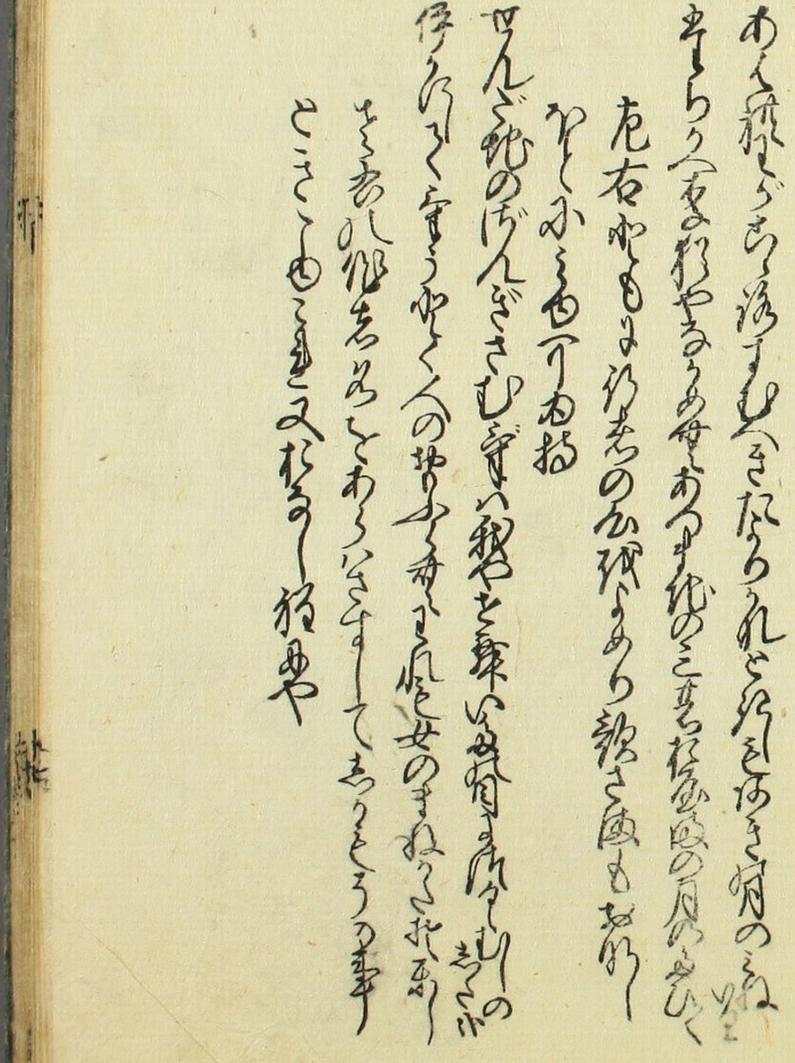
右めるり　緒の
なかさ　緒の
なかさ乃四ひ
ひろ　ひく
ひろ　ひく
ひろ　ひく

六十番

[illegible]

[illegible]

[illegible]



山伏

六十三番

鹿右衛門　勝負

六十四番

[illegible]

[illegible]

[illegible]

孫ちう

一ぶつけ別信ぶつ
なんや 祖師とハ
仏ゆえ

六十五番

[illegible]

[illegible]

[illegible]

## 金仙寺

## 法花寺

速歌

いにしへの
ゆりもの花の
ゆゑよしい

早歌うくひ
かくこそよのなかてーあの





第七段

[illegible]

四

ひとり

これハよもけだものならでんなりてハいなび

一

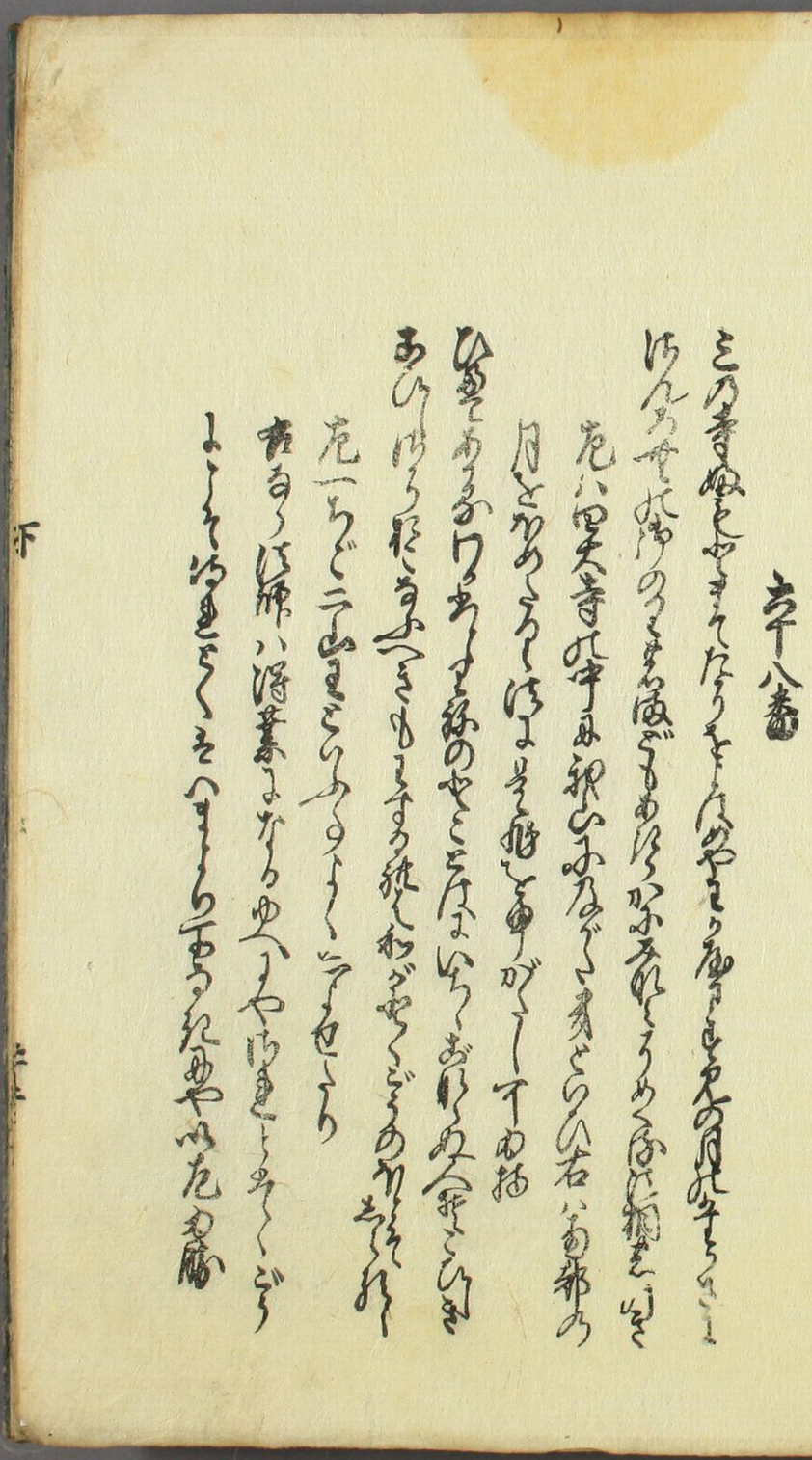
ひぐるまの人ハ海りをしたりとて

三

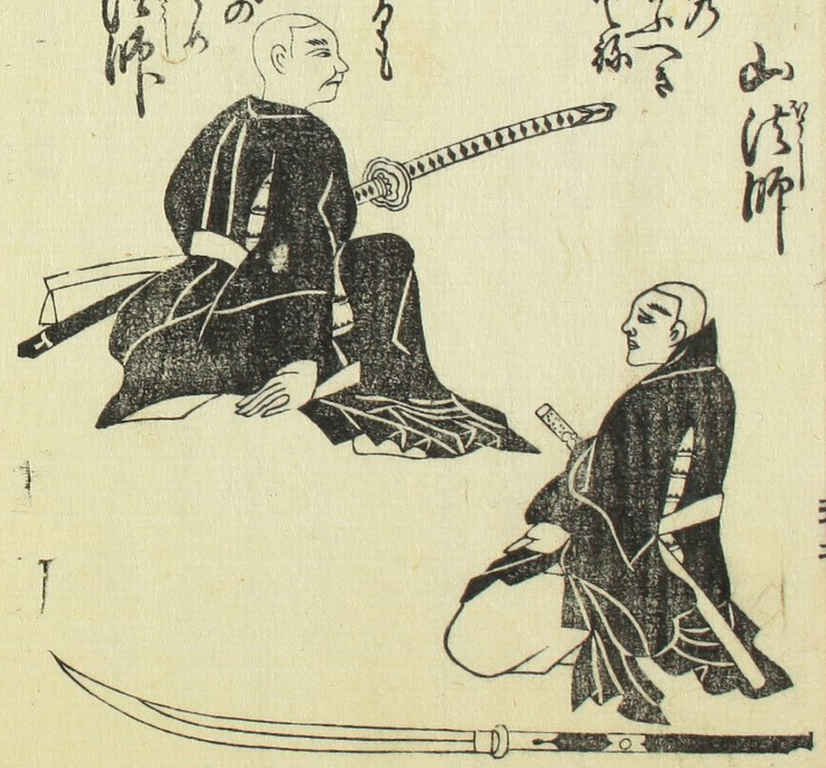
二



六十八番



## 山岡清師





## 六十九番

[illegible]

七十番

# 翁人

七十一番

[illegible]

[illegible]

[illegible]

# 浪華書林吉田松根堂藏書目錄

心齋橋通北久太郎町
加賀屋善藏

| | | |
|---|---|---|
| 四書集註 | 林道春点大字 | 十 |
| 國語正本 | 韋註改点 | 六 |
| 全文抱朴子 | 吳興郡山人葛稚川著 | 八 |
| 搜神記 | 晉干寶令升著 | 五 |
| 近思錄 | 半紙形 | 四 |
| 古文真寶 | 大字 | 二 |
| 同 | 音訓再版 | 二 |
| 同　前集 | 片カナ付 | 一 |
| 唐詩合解 | 高廷禮選 | 十 |
| 唐詩正聲 | 道春点大字 | 二 |
| 孝經大義 | 常陽碕允明著 | 一 |
| 戰國策考 | | 六 |
| 論語徵 | 徂來先生述 | 十 |
| 同　正文 | 藍田先生校訂 | 一 |
| 南留別志 | 徂來先生隨筆 和歌世語添 | 五 |
| 韓詩外傳 | 韓夫子著 | 五 |
| 周易新疏 | 河田先生著 | 十 |
| 漢隸字源 | | 六 |
| 隸辨 | 顧南原撰集 | 二 |
| 草書韻會 | 自漢至金集名家 昏唐版舶來 版行 | 二 |
| 草韻彙篇 | 自漢至明集名家 艸昏卒木翻刻 | 廿 |
| 草彙 | 筱崎三島先生輯 | 四 |
| 孟浩然詩集 | 此昏漢ヨリ明ニ至リ名家ノ草昏ヲアツメ草昏ノ集昏数部アレ共草字ノ古雅ナル世昏ニ勝ルモノナシ 永華陽先生訓点 | 一 |

藥徵　東洞先生著　三

續藥徵　村井先生著　三

醫事惑問　東洞先生著　二

醫斷　同　門人著　一

辯醫斷　堀江先生著　二

建珠錄　東洞先生試効方　門人著　一

世因手ヲツクシテ治セザル病ヲ先生古方ヲモチヒテ効驗アリシ故ヲシルス古方ヲ用テ実効ヲ取ノ亀鑑ヘ

續建珠錄　同　未刻　一

前篇ニモレタル治驗ヲアツメ又南涯先生ノ治驗ヲモアハセ附ス実ニ古方ヲモチユルノ軌範トスベシ

醫方圓機　田中牧齋著　二

此昏ハ汪氏ノ例ニ倣ヒ門ヲ十三ニ分チ理気理安剤ヲ異熱病及瘡瘍雜劑水卒ノコ至ルマテ悉ク記シ医道ノ便用トス

産航　飫肥桑原先生著　二

此昏ハ孕婦産前後ノ諸症ヲ論シ且数人ヲ療シテ最其功驗アル薬方ヲ挙ケ著ハシ産科ノ助タラシム

療治茶談五篇　南総積先生著　一

同　六篇　同著　一

書翰初學抄　一

增補日東尺牘　一

此昏ハ倍通ノ文章ヲ擧ケカタハラニ漢文ヲ附タ頭昏ニハ異名昏替ノ雅言其外尺牘重宝ノコ数多シルス

發蒙書柬式　小宮山君延著　三

尺牘ノ認ヤウ并ニ熟字名宛名聚ノ知安キヤウニノブル

消息文鑑尺牘楷梯　未刻　四

尺牘ヲ学フ捷徑ノ昏ナリ尤此昏和文ヲ述次ニ漢文ヲ以其作例ヲ記シ昏替熟字等マデ詳ニス夫巻ニハ異名類尺牘ノ式ヲ備フ実ニ尺牘初学ノ重宝タリ

翰墨蒙訓尺牘筌　白石先生著　二

此昏ハ尺牘ノ文法ヲ述傍ラ二真字ヲ付ス頭昏ニハ昏替ノ雅文ヲアゲ巻尾ニ異名并ニ昏柬ノ式法ヲ詳ニ記ス

尺牘清裁　王世貞篇　一

尺牘奇賞　陳仁錫選　四

書簡啓發　東都江南先生著　三

此昏ハ和ノ昏状ノ文言ヲ一句ツヽ挙ケ下ニ漢文ニテ尺牘ノ熟語ヲ集ノ且昏式認ヤウスヘテ初心ノ心得ヤスキヤウニ悉クシルス



同　翼　同著　一

幼科秘錄　島蘭皐先生著　二

金匱小兒方　小本　一

丸散手引艸　一

丸散薬煉薬膏薬目薬薬酒ホノ方ヲ記セリ且薬ノ製シヤウ并ニ真偽ノ見分ヤウマデ詳ニシルス

丸散煉薬ヲコシラヘント思ハバカナラズ此昏ヲ見ルベシ

治痢經驗　和漢人参考附　二

物類品隲　平賀先生著　繪図入　五

此昏ハ物産ノ昏ニシテ水土金石草木菓菜虫鱗介獣ニ至ルマデコトノヘク異同ヲ挙明カニ弁ス

聖學自在　新井白蛾著　三

闇乃曙　同著　二

右両部トモ先生ノ随筆ニシテ面白キ和談ヲ交ヘ人心ノ明徳ヲアキラカニシ又平生心得ニナルキコトヲアラハス

天地萬物造化論　魯齋王栢撰　一

此昏ハ日月ノ盈虧ヲ始メ四時五行暦占其外スベテ陰陽ニカヘハルコトヲ明ラカニトキシメス面白キ昏ヘ

佩文齋書畫譜略　賴先生閲　三

此昏ハ漢土ノ上古ヨリ清朝ニイタルマデ昏画人ノ姓名字号郷里マテモクハシク記シイロハ引ニワカツ

箋注李杜絶句　劉元高先生閲　二

貞觀政要諺解　林道春先生著　五

此書ハ唐ノ大宗群臣ヲ聚メテ國家ノ政務ヲ論セシ書ナリ

先達遺事　稲葉正信著　一

此書ハ閑斎先生オヨビ門派ノ諸賢并同時諸先生ノ事跡言行ヲ輯録ス大ニ学者ノ心得ニナル書ナリ

二禮童覽　喪礼祭礼　二

此昏ハ朱文公の家礼ヲ仮借ヨ異ノ婦女ノ為ニ平易ニ述ベタル書ナリ

三字經國字解　多賀主一解　一

此昏ハ孝悌のさとりを安記やうにしるしかなをみなの為ニ注解ノ史孝経初学撰様なとしるす

訓蒙要言錄　羅山先生著　三

此昏ハ経史子集ノ中ヨリ聖言警語ヲヌキ知人賞罰ヨリ勸孝德行君臣礼儀ニイタリ三十八門ニ分チ片カナヲ以テ注釈ニ廿ト云安カラシム

重刻讀書錄　薛文清公著　十

消息文梯　聴雨菴主人作　一
此書ハ消息文ををを書く[?]必用の書也

万葉類葉抄　村上圓方著　二

源氏物語小鑑　藤原長親著　小本　三
此書ハ源氏五十四帖の大部を小冊よ[?]先源氏五十余帖の要文を抜出し絵入して懐中本とん

紫文製錦　橋本稲彦著　八
此書ハ源氏物語五十四帖の内より自然にあるべき詞と四季恋雑と部をわかち文章を書きするよつべき使りとん

合類書籍目録　箱入　十二

日蓮上人御傳記　絵入ひらかな　五
上人御一代の事跡を委く記し祖文絵師の傳を[illegible]

儒釋筆陳　六
此書ハ玄光禅師田鱗先生詩文ノ贈答ヲ集録ノ[illegible]頭書ニ熟字ノ出処ナト悉注解ス詩文ヲ学ブニ便用ス

羣書一覧　尾崎雅嘉著　和書之部　六
此書ハ国初より出来し板行又ハ写本の書籍を書記し何の事をいふ事を委細の書法を録し作者などもしらしめ門部を立て見やすき書なり

掌中群書一覧　同著　一

哥仙二葉抄　平春幸著　三
此書ハ三十六哥仙注書[illegible]哥仙の傳を録よ[?]

職人畫歌合　繪入

西山物語　綾足大人著　三
此冊子ハ中古の事を書[illegible]
集をもし[illegible]日本紀万葉集[illegible]仮名遣を加ふ

古言梯　揖取魚彦輯　一

古言梯標註　春海　濱臣　標註再刻　一

増補掌中古言梯　一

和漢書画一覧　増補懐中本　一
此書ハ旧板ノ誤ヲ正シ遺脱ヲ補ヒ天明ヨリ文政ニ至ルマテノ諸名家ヲエラミ挙テ新刻トス

新撰字鏡　僧昌住著　二

玉乃あそび　雄川丘甫著　一
此書ハ奇[illegible]古乃器物[illegible]流なるむきび[illegible]文字[illegible]



新撰姓氏録　萬多親王著　三

校正新撰姓氏録　稲彦校訂　音引附　未刻　四
此書ハ橋本先生ノ校正ニシテ原本ノ誤字衍文等ヲコトゴトク訂正ス　又故本居大人音引一冊ヲ附ス

神代巻塩土傳　谷重遠著　二
神代ヲ解ノ書数種アリトイヘドモ多クハ正シカラズ重遠先生ハ国学ニ秀シ人ユヘ格別ノ卓見ヲ此書ニアラハセリ実ニ神代ヲ解正説此書ニナラブモノナシ

俗説贅辨　同著　四
先ふ[illegible]俗説弁三編[illegible]二編の弁を[illegible]云傳へ書[illegible]論弁を

男子訓　井澤長秀著　三
此書ハ文武数武藝武具軍用武具旅具傳[illegible]

廣益俗説辨　同著　廿二
此書ハ世上[illegible]諸書を引て其誤を正したる書なり

画學百花鳥　狩野探幽筆　四
此書ハ百花鳥の形を[illegible]画家の奥秘を[illegible]

小謡朗詠集　小謡三百番　懐中本　一
春夜[illegible]婚礼元服[illegible]

町見辨疑　西川先生著　五
阿蘭陀流ノ天文ヨリ割イダセシ町見ジユツニシテ少シモタガフコトナシ道具ハ図ニアラハス町見水盛大成ノ書ナリ

石印集誼　芽州木世馨編　二
此書ハ石印の式法[illegible]

陰陽方位便覧　皇和司天家鑑本　三
此書ハ年家神殺月家神殺コトゴトク図ニアラハシ俗ニ見安キヤウニヒラカナニテ書ワラ子家々ニ在タルベキ人ハカタハラニ置不断見ルベキ書ナリ

陰陽五要奇書　翻刻　三

女學五常弁 絵入 一
此書ハ又君と兄人倫の道を幼年よりと児女のさかしき安さやうおしゆる事を絵入にして見安からしむ

女學いろは兒よ 絵入 一

道二翁童蒙訓 絵入 三
此書ハ児童に忠孝の道をおしへ且ハ女子たちまでよみやすくおしへし書なり

闇路提燈 洛西乞士著 一
人間一生乃安心の大法を委く解神儒佛の道をはなはだわかりやすくときたる書なり

見聞獨歩行 同著 一
外人間安心の秘事を此書を見れバ大に徳あり

東遊記 橘南谿先生著 十

西遊記 同著 十
此書ハ先生医学修行のため諸国漫遊の折から名所古跡奇談珍説を書記し又其地の風俗忠孝貞節乃実録を中にまじへ人をいましむる書なり

土佐國式社考 谷重遠著 一

法華安心紀物語 絵入 二
此書ハ田舎人乃安心上藹の尋ねに安心の道理を述たる書を絵入にせしなり

番神問答抄 日達著 二
此書ハ三十番神を説き正道を述べ邪説を退け示せしなり

鎌倉殿中問答記 同著 二
此書ハ北條相模守高時乃執事長崎入道館において日印對論せし問答記なり

手相即坐考 蘆塚齋著 一

同 續篇 同 一

永代調法記宝藏 大本 一
此書ハ先ハ算見一九々の算術を記し次ハ服忌令人の名乗百官武家諸役名目万積物の書札法式万年暦食物製法料理献立其外世に用ゆる事を集めし重宝第一の書なり



書喩 東都平陵先生著 一
此書ハ書法古今異同草隷并假名ノ用ヒヤウ出処ヲ詳ニ説ク

書札指南 長玄海堂著 一
此書ハ諸通用文章を大字にてしるし又其書の文章乃替詞を上中下にわけ其外に要用乃字引を加ふ

速玉用文章法藏 絵入 一
此書ハ文章を大冊画入にしるし日用重宝の文章を多くのせたり

花月文章 葉川玄紀 一
男女の用文章をしるし大字の手本なり

文章龜鑑 同筆 一

筆法温知書 篠田玄紀 一
此書ハ筆の持やう字体肥痩の法九筆八病の法を記し書を好人の見るべき書なり

御武用童子訓 絵入 一
此書ハ北條泰時の定めたる式目の注釈し童蒙のため安き教訓の書なり

万年大雜書永代暦 一
此書ハ世上に数多ある雑書と違ひ正月より十二月まで日の吉凶を見安く此書にかぎるなり

大万寶節用字海大成 一
此節用集ハ今流行乃文字をあつめ又大武鑑書札式法其外日用重宝なる物類くはしく画図を加へ文用文章を記せり

女五常訓倭織 貝原先生著 絵入 一
此書ハ婦人乃守るべき五常乃道を児女にもわかりやすく大字にしるし教訓の書なり

女童子訓藐草 同先生校訂 絵入未刻 四
此書ハ幼き女子の習ふべき事を記す

大和女訓 井沢長秀著 絵入 三
此書ハ婦女子の教訓を集め貞女烈女の傳を多くのせたり

改正日本輿地路程全圖　赤水先生著　一
此圖ハ六十余州ノ山岳江河城地郷村神祠佛閣名所古跡街道海路マデモ地形方位ヲ微細ニシルス

字引大全　一

長享かれら節用集　十二門部分　一

増補好文節用集　小本世話字引付　一

古今立花指南大全　一
此書ハ立花英人及ビその図を顯ハし其外秘伝奥旨を述ベ立花ハ花ハ何か夏ヲ主とし立花の書数多ハ是を呼出ス〻微細ヲ尽ハし〻

甘氏仰正　明林陵甘暘旭述　清劉光君原校　一
此書ハ上蔡原ヨリ起リ印論奉漢ヨリ明清ニ至ル各朝ノ醸製品類劍形等精論ヲ奉ク図製ニ至ル迄少モ漏レナシ

童蒙手引筆道三部書　沙門鑒靈述　三
此書ハ筆の持ヒ方始め運筆ヲ変紀点画ヲ式
論字体法帖名目ヲ図ヲ以〻〻〻論ず
楷書仮名ヲ巻ノ運筆ヲ法制点画ヲ式変
字体ヲ振ヒ方ヲ楷書ヲ変形ヲ紀ヲ

望鏑日本輿地路程全圖　小形四令彩色　一

改正日本圖　小形　同　一

大日本指掌細見圖　大絵図里数付　一

法曹至要抄　坂上兼明著
此書ハ淳海公冬嗣ヲ以宗ヲ時平公等の選ビし律令格式の中ヲ法家の至要ヲ抜ヒ出シ

壁餘小録　東都山白散人選　二
此書ハ往昔ヲ名物ヲ方の不拘ノ名ヲ又ハ文ヲ奉ヒ
ヒ比の絵ヲ紙数ヲ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻

痘疹心得草　沙門　一
此書ハ日本ヘ痘瘡ヲ初ヒ発ヒ日数ヲ数ヒ始ノ事
発ヒ麻疹水痘の分ヒ看病人の心得ヲ悉ク

同咒調法記　同　小本　一
此書ハ咒ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻

同紅大よ里　同　一枚摺
此書ハ紅ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻

同美面定　同　一枚摺
此書ハ美ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻ヒ〻